

校歌制定

湘南高校の校歌は、学校創立 12 年目の 1933 年(昭和 8 年) 2 月、作詞 北原白秋、作曲 山田耕筰の両氏により作られました。

創立からおよそ 10 年の間は、式日などにも校歌は歌われていませんでした。ただ、1924 年(大正 13 年) 10 月に、最初の運動会が開かれた時、校歌・応援歌を作ろうと言うので生徒から歌詞を募集し、教諭が作曲した応援歌を、校歌代わりに歌っていました。やがて、創立 10 周年を迎え、校風もようやく確立されるに及んで、校歌制定に踏み切り、白羽の矢を立てたのが、作詞は当代一流の詩人北原白秋氏、作曲はこれまた一流の山田耕筰氏でした。

白秋先生は、工場もなく人家もまばらな学校の周辺を散歩されました。雲雀あがる一面の麦畑、南には澎湃たる相模灘があり、西に秀麗の富士を仰ぐこの校舎、師弟相和し、松の如き正しさと気品を持って自由な研学を誇り、立身報国を旨とする校是など、歌詞には細かな配慮が払われています。校歌なので、「城ヶ島の雨」のような情緒はうかがえませんが、校歌としてはまさに天下一、実に見事なでき栄えでした。作詞北原、作曲山田両先生は多くの学校の校歌を創られましたが、湘南の校歌はそれらの中でも秀逸と言われています。

この校歌はあらゆる催しで歌われ、戦後、高等学校に改められた今日でも、一字一句たりとも変更せずに、原文のまま、なお、変わることなく、そしてまた、これから後も永遠に歌い続けられることでしょう。

九州柳川市にある「北原白秋記念館」には、白秋先生の孫の北原ルミさん(65 回)揮毫による湘南高校校歌の額が掲出されています。

北原白秋記念館



北原ルミさんと天野武和前会長

参考 校歌及び応援歌など

校歌	(1933 年)	< 作詞 / 作曲 >
「落成式の歌」	(1921 年)	北原白秋 / 山田耕筰 [作詞作曲不詳]
「湘中応援歌」	(1924 年)	伊原 隆(1 回) / 堀 重太(教諭)
「湘南健児の歌」	(1928 年頃)	[作詞作曲不詳]
「五丈原頭」	(1929 年頃)	[作詞作曲不詳]
「若人の歌」	(1932 年)	浅野正城(8 回) / 鍋木欽作(教諭)
「応援歌」	(1935 年)	[作詞作曲不詳]
「嗚呼湘南の朝ぼらけ」	(1936 年)	伊東 実(12 回) / 鍋木欽作(教諭)
「我等は湘南」	(1936 年)	鈴木清一(教諭) / 鍋木欽作(教諭)
「青春の歌」	(1948 年)	熊澤義宣(22 回) / 鍋木欽作(教諭)
「選手を送る歌」	(1948 年)	園 冬晴(25 回) / 鍋木欽作(教諭)

全国制覇

サッカー部

1946年(昭和21年)戦後間もない第1回国民体育大会中等部決勝戦に臨んだ湘南は、11月3日西ノ宮サッカー場において神戸一中と対戦し、3 - 2で下し、全国制覇を成し遂げました。

当時の赤木校長は、その感激を、「球を蹴り球を蹴り復た球を蹴り、二十六年蹴り復た蹴る、甲子原頭全国を制す、国家再建復た球に似たり」の詩に託しました。



サッカー部 第1回国民体育大会で全国優勝
(1946年)

なお1948年(昭和23年)第3回国民体育大会(全国新制高校蹴球大会)でも決勝に進出しましたが、広島高師付属高に1 - 0で惜敗し、2度目の優勝はなりませんでした。1950年(昭和25年)頃から数年間、東京の大学サッカー界に湘南時代というべき時代が続き、東大、早大、慶大、明大の主将ほか日本代表級多数が湘南出身者で、関東学生選抜の半数以上が卒業生で占められたこともありました。鎌倉市チーム(全員湘南OB)が第1回都市対抗で優勝したのも、この頃です。

サッカー部は、過去、中等学校選手権大会に3度(1937年・39年・40年)高等学校選手権大会に3度(1962年・66年・88年)の6回出場しています。また、国体には4度(上記の通り、1946年の第1回大会は優勝、48年の第3回大会は2位、61年の第16回と62年の第17回大会)出場しています。

硬式野球部

1949年(昭和24年)第31回全国高等学校野球選手権大会、この大会に創部4年目にして初出場した湘南は、予想を完全に覆して優勝し、世間の人々をあっという間に驚かせました。



8月13日の開会式から一日おいた15日、1回戦不戦勝の湘南は、まず城東高(徳島県)に気力で圧勝、さらに一日おいて準々決勝では市立松本高に先取点を奪われながらも、9回に決勝点をあげ勝利し、翌日の準決勝は、強豪高松一高を相手に、前半リードしながら同点とされ、雨中延長に入りましたが、10回裏決勝点を奪い、予期せずまた予想されぬまま、対岐阜高の決勝戦に臨みました。前半岐阜高に2点の先行を許し苦しい戦いとなりましたが、6回

に追いつき、8回には2点を加えて、ついにそのまま押し切りました。

初陣湘南の優勝は、ネット裏の記者をして瞠若自失(どうじゃくじしつ)させたほどの驚きで、朝

日新聞の飛田穂洲氏は、これを「湘南無欲の勝利」と論評し、後々まで語り継がれました。かくして真紅の大優勝旗は、1916年(大正5年)第2回大会の慶応普通部以来33年ぶりに箱根の山を越えたのでした。

なお野球部は、春の選抜大会にも、第24回(1951年)第27回(1954年)に出場し、甲子園を沸かせました。その後は、1994年(平成6年)夏の神奈川大会3位(38年振り)まで進出するなどしていますが、私学の壁を破れないでいます。1974年(昭和49年)から数年間、東大正選手9名の内、湘南出身者が5名という時代もありました。

吹奏楽部

1952年(昭和27年)11月16日、東京芸術大学奏楽堂で開催された朝日新聞社主催全国吹奏楽コンクール高等学校の部に、全国精鋭10校と共に出場し、課題曲の行進曲「エル・キャピタン」、自由曲「ガラスの靴」を演奏し、晴れの第1位となり、大優勝カップを獲得しました。

<上記以外の全国大会出場の部活動> 数字は、全国大会出場回数

- ・ 陸上競技部 [1956年 総合成績全国2位、フィールド1位]: 14回
- ・ バレー部 [1948年 全国2位]: 3回
- ・ フェンシング部 [1965年 男子団体準優勝]: 28回
- ・ バスケット部: 4回
- ・ 水泳部: 3回
- ・ 卓球部: 8回
- ・ 軟式テニス部: 7回
- ・ 体操部: 10回
- ・ 相撲部: 6回
- ・ 剣道部: 2回
- ・ 弁論部 [1951年 優勝、1957年 優勝]
- ・ 新聞部 [1955年 第1回大会 3席]
- ・ 書道部 [1949年 金賞、1952年 金賞]
- ・ 美術部 [2008年 全国高校総合文化祭出場(女子)
全日本学生美術展 特選(男子)]
- ・ 囲碁将棋部
 - [1977年 金子俊道さん(55回)第1回全国高校囲碁選手権大会優勝]
 - [1979年 囲碁の部団体戦3位、将棋の部団体戦4位]
 - [1984年 齋田晴子さん(60回)将棋女子個人戦優勝]



陸上競技部 総合成績全国2位
フィールド1位 (1956年)

○2011年 和田花子さん(2年生)フェンシング ジュニアワールドカップ日本代表に選抜され、オーストリア大会・スウェーデン大会に出場

この他に、個人による参加では、国体ヨット競技少年男子FJ級で優勝、ビーチバレー全国大会出場などがあり、関東大会、県大会でも、各部が多くの優勝を飾っています。

男女共学スタート

戦後の教育改革により、湘南高等学校になって2年後の1950年（昭和25年）4月に、男女共学がスタートしました。新生430名中59名の女子が1期生として入学し、各クラスに5～6名が組み入れられました。

「トイレと更衣室だけは別にする、あとは全て区別しない」という指導方針でしたから、出席簿も男女の区別なく五十音順に並んでいました。最近でも男女同権の話題になると、「出席簿の名前が男子の後に女子が来るのはおかしい」との新聞記事が時々掲載されますが、湘南高校は最初から出席簿でも男女の区別がなく運用されていました。



女子1期生

女子生徒の入学前は、藤沢高女（現・藤沢高校、平成22年4月より藤沢清流高校）との混声合唱や、演劇部の平塚女子高（現・平塚江南高校）との合同公演など、女子のいないマイナスを凌いできましたが、いよいよ1950年（昭和25年）の文化祭に湘南の女子生徒がデビューしました。このとき2年生の演劇での各組競演に女子1年生が友情出演をした場面もありました。



天野文相、女子生徒に迎えられて

そして1951年（昭和26年）女子2期生として63名が入学。この年の10月に「創立30周年記念祭」が実施されましたが、異例なことに一高校の記念式典に文部大臣が出席され、講演を行いました。後日、天野貞祐文部大臣は「湘高新聞」の取材に答えて、「男女共学こそ戦後良くなったことの大きな点である。これからは男女お互いに尊敬しあって...」と、新しい時代を担う湘南高校生に期待する姿勢を訴えられました。

それから40年後の「創立70周年記念誌」に、女子1期生は当時を振り返り、「機会を均等に与えられたのだから、私達にも甘えは許されない。男子生徒に伍して頑張ろう。それには同じだけの実力の裏付けがなければ、と私達も一生懸命努力しました。男性、子供、家庭、社会に対する開かれた目、家事や趣味などもこなしながら、仕事も自信を持って続けていける強さ、これは先生・生徒両サイドのパイオニアによって勝ち得た理想的な共学の成果と言えるのではないのでしょうか。」と、感慨深く語っています。

実に湘南中学校から新しい時代の湘南高校へと湘南が大きく変化する端緒になったのは、男女共学だったのかも知れません。

* 今も続く 70分授業の由来 (故・望月英雄先生談 在任：昭和 23～45・47～49年)

1948年(昭和23年)4月学制改革により、湘南中学は湘南高等学校になりました。当時各学校は翌1949年(昭和24年)からの新制高校教育課程実施に向けて、準備の真っ最中でした。湘南高校でも、新教育課程の大きな特徴の一つである選択科目の導入について、研究会を開いたり、他校を視察したり、その対応に追われていました。

或る日の職員会議で「都立日比谷高校では、1授業時間が100分で、各生徒が自分の希望する科目を選択した時間割をもって授業を受けている」との報告があり、1948年(昭和23年)3月に学校を卒業、4月に湘南に赴任したばかりの新米教師の私が、この課題を任されることになりました。

調査によるとその内容は、1授業時間を100分として2週間分の時間割を作り、生徒が必要とする必修科目や選択科目を全部網羅し、しかも選択科目は学年別の境をなくして全講座を設け、これに対し生徒個人が各々自分の希望する科目の講座に登録するというものでした。原理は簡単ですが、実際には、限られた教員数で1000人近い生徒の講座を全て配置し、選択科目の講座は異学年の生徒がまざり、しかも講座の人数を50人に制限しなければならないという条件を満たすのは、容易なことではありませんでした。

日比谷高校の先生が「これは日比谷高校だから出来るんで、ほかの高校では無理ですよ」と言われた言葉に対し、日比谷高校で出来て湘南高校に出来ない筈はないという気持ちが常に私に実現への勇気を与え、多くの先生方の協力を得て体系は出来上がりました。

こうして出発した100分授業にも問題点があり、1956年(昭和31年)4月に2年3年はクラス替えをしない固定クラスに、かつ、1授業時間を70分に変更しました。70分は50分と100分の折衷案のようですが、実はある心理学者が「16歳～17歳くらいの人間の緊張の持続度は70分が限度である」というのが根拠になっています。

1964年(昭和39年)には、県教育委員会から50分授業で成果が上がるようにとのことでしたが、70分授業の長所を縷々説明し、経験的にこれが湘南高校の生徒に一番適した授業であることを力説し、了承を得て継続出来たこともありました。

数年前、現在でも70分授業が続いていることを知った時は、感無量でした。私が湘南高校を離れた後も70分授業を守り育て続けて来られた多くの先生方に感謝しつつ、当時の苦労話は、あくまで湘南高校に対する私の自己満足として、心に残しておきたいと思っております。

* 学校単位での定期戦 浦高戦



藤沢駅から湘南高校までパレード(銀座通り)

1957年(昭和32年)10月19日、湘南高校と埼玉県立浦和高校との「学校対抗」の定期戦が、浦和高校でスタートしました。スポーツ関係の定期戦は珍しくないことですが、運動部から文化部まで、生徒全員に職員も加わっての学校ぐるみでの定期戦というのはあまり例のない試みでした。

きっかけは新聞部同士の話し合いから。以降、駅前から応援団を先頭に行進、市民も含めて歡

迎するという風景がしばらく続きました。浦和は男子校とあって「湘南の女生徒が目的では」との声もありましたが、2002年（平成14年）5月の第46回を最後に打ち切られるまで、45年続いた一大行事は、スポーツ、文化、そして生徒間交流の懸け橋になりました。

浦和高校校庭



* 湘南を戦火から守ったピーク先生のこと

「湘南大好き人間」を自認する人は多くいます。ここにアメリカ人でありながら、藤沢の地に、そして秀麗の富士を仰ぐ湘南中学に強く魅せられた一人の青年教師がいました。創立当初の2年間、英語教師として赴任していたピーク先生です。彼は、帰国後、コロンビア大学で東洋史専攻の教授となっても、藤沢や湘南中学に対する愛着の思いを強く抱き続けていました。

しかし、日本とアメリカはあの不幸な戦争に突入します。1945年（昭和20年）終戦の年、アメリカの本土への攻撃はますます激しさを増し、東京、横浜と戦火は広がるばかり。そして次は藤沢であろう、と誰もが予測しましたが、結果、藤沢は爆撃されませんでした。

藤沢が戦火から免れたその陰には、当時アメリカの対日戦略の経済情勢分析に当たっていたピーク先生の存在がありました。それを、戦後私たちは知ることになります。当時ピーク先生は、「藤沢に軍需工場がある」という情報に接しひどく心を痛め、独自の調査で「その工場(日本精工)は消費物資の製造関係の工場である」という報告書をまとめ、国防総省に提出したのです。この報告書のおかげで藤沢が戦火から免れたことは、ほぼ間違いのないことと思われま

す。後に藤沢の地を訪れたピーク先生は、かつての湘南中学が変わりなく無事に在ることを大変喜んだと聞いております。これはまさに、先生の「湘南大好き」の思いが生んだ結果と言えま

湘南中学の英会話教師の思い出

Cyrus H. Peake

私はアメリカの大学を卒業後、日本で英語を教えないかという誘いにのり、湘南中学にやってきたのですが、ここでの2年間の生活が私の人生航路を変えてしまいました。

湘南から見る富士山の永遠な魅惑、藤沢から学校へ通う楽しい道程で見かける人々の変わった生活様式などに触れ、日本の美しさのとりこになりました。そこにおいては、私が湘南中学の生徒に教えたことよりも、私が湘南から教えられたことの方がずっと大きかったと思っています。

私は戦後マッカーサー元帥の司令部員の一人として再び日本にやってきましたが、湘南中学の卒業生が、社会のあらゆる分野で高い地位につき責任を持って活躍していることを目の当たりに見て、湘南中学が一流の中学であることを再認識させられました。それはひとえに、初代の赤木校長先生の指導力に負うところが大きかったと思います。

ある時、先生方と学校まで藤沢の町を散策しましたが、町の真ん中にある工場を過ぎようとしたとき、「ああ、これがかつて国防総省爆撃目標課に報告したあの工場だな」という感慨にふけりました。

私は戦時中ずっと藤沢と湘南付近が爆撃を逃れることを祈っておりました。そして、戦後、あの思い出深い散歩の折りに、この地区が爆撃を受けなかったことを見知って心から喜びました。

